

# 現代フランスの人種主義

——差異主義的人種主義理論をめぐる——

畑 山 敏 夫

## 1. はじめに

1973年の石油危機に端を発する、ヨーロッパ諸国を襲った経済・社会危機は、移民労働力に依存してきたフランス、西ドイツなどで、「移民問題」を深刻化させていく。即ち、高度成長期には、下層労働力として必要とされた移民労働力も、経済不況の到来とともに受入れが停止され、移民労働者の滞在は長期化し、受入れ国で恒常的な存在になっていった。移民労働者が集中する地域では「ゲットー」が形成され、教育・住宅・治安などの問題を通して、移民に対する反感、不安感が住民の間に高まっていき、移民の存在は社会問題化していった。

1981年と1986年に政権交替を経験したフランス社会では、左翼政権によっても保守政権によっても、失業・治安・景気回復などへの有効な政策がとられず、政治的スキャンダルが相次いだこともあって、政治不信・無力感・無関心が国民の中に広がっていった。左右両翼への政治的両極化、国民における政治への高い関心と参加意欲、イデオロギー指向・闘争好きといったフランス政治のイメージは変容し、今や、私生活への自閉、現実主義的態度への傾斜といった現象が顕著になっている<sup>(1)</sup>。

また、国民の中には、自国の抱える諸困難に由来する様々な不安の感情が広く共有されている。改革への不安、移民への不安、経済の先行きへの不安、ヨーロッパ統合への不安、自国の民主主義への不安など、従来の政治・社会の価値観や制度への信頼が揺らぎ、自信喪失と劣等感が、国民の少なからぬ部分を捉えている<sup>(2)</sup>。特に、生活環境の悪化、民衆文化を従来まで支えてきた生活モードの解体、関係とコミュニケーションの希薄化などは、民衆の中で、移民への不安感、反感を強め、人種主義的言動の受け皿が形成されていっ

た<sup>(3)</sup>。

そして、世論に浸透する外国人嫌いの感情と偏見を背景に、移民問題は、極右勢力によって政治的に利用され、人種主義的言説が大量に生産される。フランスの政治生活で、移民問題が政治化し、新たな争点を形成することになる。

1993年3月の国民議会選挙に圧勝して誕生した保守政権では、早速に、警察力の強化、特に、身分証明書コントロールの容易化、不法移民の抑制・送還、国籍法の改正といった措置が検討され、移民への不寛容な政策が打ち出されている<sup>(4)</sup>。今日でも、移民問題は、フランス政治の重要な争点であり続けている。

本稿では、1980年代のフランスで、国民の間に急速に広まっていった反移民感情を背景とした人種主義勢力の台頭をテーマとする。それは、フランスで展開される人種主義の主張に、従来の人種主義理論とは違ったタイプの新しい立論が見られるからであり、従来の人種主義と異なった特質、即ち、E・バリバルが、学問的装いをこらした人種主義の新展開と指摘している現象<sup>(5)</sup>が指摘されうるからである。

反移民的言動が表面化して以来、フランスでは、人種主義に関する研究が活発になっているが、その中でも、社会学者タギエフ (P.-A. Taguieff) によって精力的に展開されている理論的分析が、われわれの新しい人種主義という問題関心には有効な理論的装置たりうる。

彼が、「差異主義的新人種主義 racism-différentialiste」と分類する人種主義の理論的特質については、最近、わが国でも紹介されている<sup>(6)</sup>。本稿では、タギエフの新人種主義についての分析モデルに立脚して、極右勢力の中の新人種主義的言説を具体的に分析する作業を中心的課題としている。

そのような、人種主義の新しい潮流の具体的分析は、現在のフランスで、移民問題を梃子に、外国人排斥が高まり、極右が台頭している現象を理解するのに有益であろう。また、新人種主義の登場が、フランスの抱えているアイデンティティの危機と関連する、より根の深い現象であることも明らかになり、新しい人種主義の言説に直面して、従来の反人種主義の立場からの反撃が有効に機能していない理由も理解しうるであろう。

- (1) cf. Rémond (1993).
- (2) cf. Duhamel (1993).
- (3) Jacquin (1992), pp.163-4. 生活・経済環境の悪化が、民衆的な人種主義の温床を形成していることについては、以下の文献を参照 [Wieviorka (1992), Jacquin (1992)]。
- (4) *Le Monde*, mardi 6 avril 1993. 結局、移民規制法案は7月13日に国民議会で可決された。5月には国籍法も改正され、外国人の入国・滞在、国籍取得の条件が厳格化された [『朝日新聞』, 1993年7月16日]。
- (5) Balibar (1992), p. 80.
- (6) 梶田 (1992), 笠間 (1990) が、タギエフの新人種主義に関する理論展開を扱っている。

## 第1章 人種主義的政治勢力の台頭

本章では、「新右翼 Nouvelle droite (=ND)」と「国民戦線 Front national (=FN)」の具体的言説を通じて「差異主義的人種主義」の内容にアプローチする前段の作業として、タギエフの提起する現代の人種主義—反人種主義の分類を簡単に確認しておこう<sup>(1)</sup>。

タギエフによれば、人種主義は二つのタイプに分類しうる。第一は「個人—普遍主義的」タイプの人種主義である(R I)。R Iは「個人—普遍主義的」価値観に立った自民族中心の「普遍主義」であり、同化の強制、少数民族のアイデンティティの破壊へと向かいやすい。他方は「伝統一共同体主義的」タイプの人種主義である(R II)。R IIは、隔離・排除の論理を前面に出し、自集団の純粋性・アイデンティティの保全を重視する差異尊重の人種主義である。

同様に、反人種主義も二つのタイプに分類される。第一は、「個人・普遍主義的」価値観に立脚する反人種主義で、人権の主張、「閉じた」共同体に固有の諸価値の人種主義としての否定、「進歩」への障害としての共同体的アイデンティティと「個別主義的」伝統を廃止するという理想、国民的・民族的・文化的境界を越える個人の普遍的混淆の肯定といった特徴をもっている(A R I)。

他方は、伝統一共同体主義的反人種主義で、「差異への権利 droit à la dif-

表1 タギエフによる人種主義—反人種主義の分類

レトリック類型 イデオロギー的位置	社会型の論議 個人—普遍主義	共同体型の論議 伝統一共同体主義
人 権 主 義 (R)	<p>人権主義Ⅰ (RⅠ) (反人権主義Ⅱによる人種主義)</p> <p>自民族中心主義な普遍主義 (画一化/地球的規模の非差異化) : 最も「文明化された者」の指導による世界帝国</p> <p>{ 同質好き } { 異質嫌い }</p> <p>同化の人種主義 (ジェノサイド=集約的アイデンティティの破壊、文化的特殊性およびエスニック型の崩壊)</p> <p>フランス共和派型 (同化) 支配/搾取 共産主義 帝国主義的普遍主義</p>	<p>人権主義Ⅱ (RⅡ) (反人権主義による人種主義)</p> <p>混合嫌いの差異主義 (普遍の放棄/個人への非実現) : 地球的規模のアパルトヘイト</p> <p>{ 同質好き } { 異質嫌い }</p> <p>排除の人種主義 差異化 純化 選別化</p> <p>アングロサクソン型 (隔離) 分離/排除 ナチズム 民族の共同体</p> <p>絶滅 (ジェノサイド =集団的殺戮)</p>
反人種主義 (AR)	<p>反人種主義Ⅰ (ARⅠ)</p> <p>個人主義 (個人的なアイデンティティ/差異) 平等主義 ヒューマニズム 合理主義 人権 選択され/つくりだされたアイデンティティ (差異を越える) 普遍主義 閉鎖的集団性における個人の幽閉に対抗 隔離に対する戦い 人権の尊重 集団の偏見の破壊</p>	<p>反人種主義 (ARⅡ)</p> <p>集団のアイデンティティ主義 (集団的なアイデンティティ/差異) 等級主義 個別主義 伝統主義 差異への権利 (民族多元主義) 定められ/引き受けられたアイデンティティ (差異を保護する) 差異主義 集団のアイデンティティと確実性の保護 疎外に対する戦い 民族の権利の尊重 集団のアイデンティティの肯定</p>

出典: 笠間 (1990), 50頁より引用

férence」, 固有の伝統を保全する民族の権利, 集団的アイデンティティを維持するという理想, 差異を消滅させる民族絶滅とジェノサイドにつながる普遍主義を否定するといった特徴を持っている (ARⅡ)。

タギエフが, 以上の人種主義—反人種主義の諸タイプの特徴をより詳細に展開したのが表1である。歴史的には, RⅠは, 典型的にはフランス型の帝国主義・植民地支配に含まれていた人種主義である。植民地支配者は, 被植民者を経済的に搾取し, 自らの支配を正当化するイデオロギー的道具として人種主義的主張を利用し, 被植民者の知的・文化的劣等性をその根拠として

いた<sup>(2)</sup>。

他方、R IIの典型は、ナチズムに含まれていた人種主義である。ナチスは民族的・人種的共同体の純粋性を重視し、ユダヤ人との混淆による人種の純粋性の劣化を嫌うタイプの人種主義である。ナチスは、集团的差異の防衛のために民族絶滅へとエスカレートした事例であるが、このタイプのより穏健な事例は、民族的コミュニティの隔離を図るアパルトヘイト政策である。

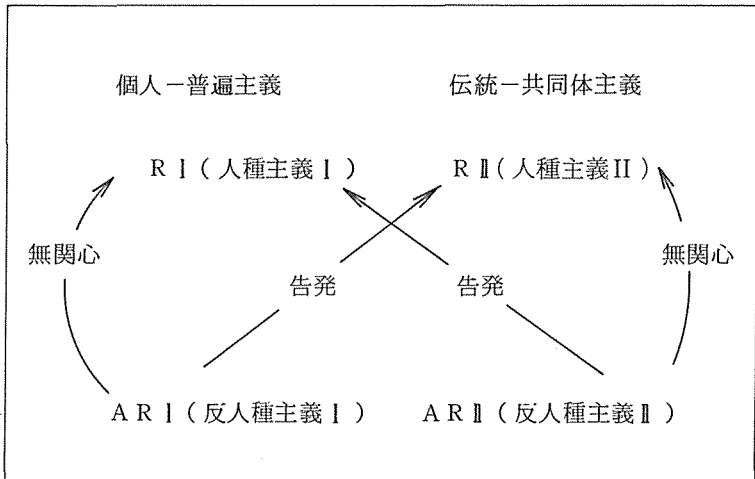
A R Iは個人主義、ヒューマニズム、人権、合理主義といった西欧近代の諸価値に依拠して人種主義に対抗するもので、わが国も含めて、現在でも反差別運動は、それらの諸価値を軸に反差別の理論と実践を展開している。他方、A R IIは、1970年代に隆盛を見る地域主義運動やフェミニズム、少数民族の解放運動を背景にした発想で、集团的アイデンティティや民族の権利、伝統主義、個別主義に立脚して人種主義に対抗するもので、差異やオリジナリティを破壊する自民族中心主義的な普遍主義の表出を人種主義として批判する。

以上のような人種主義—反人種主義のタイプ間の関係を図式化したものが次ページの図1である。R IとA R Iとは、個人—普遍主義の価値に立脚し、R IIとA R IIは伝統—共同体主義の価値に立脚しており、両者は同一の規範的価値の両義的表出の側面があることが分かる。

さて、本稿で分析の対象とするF NやN Dの人種主義はR IIに分類しうる。F N、N Dの人種主義を理解する上で重要なのは、タギエフの提示する分類では、まず「差異」をめぐる態度にある。即ち、R Iは「同質好き／差異嫌い」であり、R IIは「同質嫌い／差異好き」である。故に、R Iは、疑似科学的に論証された不平等性を根拠に差別を正当化するが、R IIは、文化的・集团的アイデンティティや差異性の称賛に依拠して差別を正当化する<sup>(3)</sup>。

A R IIは、同化主義的で差異嫌いの人種主義（R I）は告発するが、同じ伝統—共同体主義のイデオロギーに立脚する人種主義の形態（R II）に対して盲目になってしまう<sup>(4)</sup>。また、F NやN Dの人種主義は、集团的差異を前面に人種主義的言説を構成する、差異主義的で同質嫌いの人種主義であり、人種主義が同化主義であり、差異の否定であるというR Iの概念では、F NやN Dの言説に特有の差異主義的転換を説明しえない<sup>(5)</sup>。

図 1



R I (人種主義 I) : 同化 (疎外)

R II (人種主義 II) : 隔離 (差別)

A R I (反人種主義 I) : 個人間での権利の平等

A R II (反人種主義 II) : 共同体的アイデンティティへの権利

出典 : Taguieff (1989), p. 403.

故に、差異主義的人種主義の側からの反攻、即ち、人種主義概念のすり替え、反人種主義側への「人種主義者」というレッテルの転嫁に対して有効に対処しえないという事態になる。

例えば、NDのシンパであるパウエル (L. Pauwel) の「人種主義は多様性の否定と拒絶である。それは、人間性を唯一のモデルに還元する試みである」<sup>(6)</sup>という発言が典型であるが、「真の人種主義」= 普遍的モデルの強制、差異嫌いという人種主義の意味転換が図られている。

結局、彼らは「寛容と多様性」<sup>(7)</sup> (ブノワ) という有利なポジションを占め、「真の」反人種主義は、人種的・文化的に異質な共同体間の差異の絶対的尊重であると規定する。そこから、彼らは自らを「真の反人種主義者」、従来の反人種主義者を「真の人種主義者」として意味を逆転させるのだった<sup>(8)</sup>。

次に、差異の肯定は、集団的アイデンティティへの態度にも直結する。即ち、R I は、被抑圧集団の文化的特殊性に無神経で、そのアイデンティティ

を破壊し、支配者側への同化を要求する。故に R I は、自己—他者の集団的アイデンティティには無頓着なタイプと言えよう。

R II は、共同体間での文化の共約不可能性を前提に、自己の帰属する共同体のアイデンティティを防衛・発展させ、共同体外からのアイデンティティの劣化、解体の脅威と闘うことが至上命題であり、その純粋性を神聖視し、集団間の混淆を最大の誤謬と見做す。故に、R II は、他民族のアイデンティティを抑圧、破壊する植民地主義、帝国主義の R I を批判し、それに対する第三世界の闘いを支持さえる。

彼らの差異主義的人種主義 (R II) の立場から同化主義的人種主義 (R I) に対する批判は、ND の理論的指導者ブノワ (A. de Benoist) の以下のような言説によく示されている。

「皆殺し的人種主義からアイデンティティを風化させる異文化受容まで、すべての形態の国民の絶滅や人格喪失の中で、おそらく、最も邪悪なものの一つは、はっきりとそれを言う必要があるが、長らく、より顕著な例証の一つを植民地の経験の中に見出していた同化主義 assimilationnisme であった。エスノセントリズムの古典的なものである同化主義は、イデオロギー面では、『進歩』への信仰、歴史の単線概念、社会生活の普遍化という最適条件が存在するという信念、法の客観的現実についての暗黙の確信と同様の古典的諸要素が見出されるというのが顕著な点である」<sup>(9)</sup>

同化主義 (R I) は、普遍主義を武器に、国民の絶滅や人格喪失をもたらしてきた元凶として糾弾されている。

さて、以上のような差異主義的人種主義が FN や ND を媒介として台頭し、人権や平等、ヒューマニズムなどを武器に人種主義と闘ってきた反人種主義陣営が混乱、動揺しているのが現状である。即ち、反人種主義の陣営においては一方では、多元性・多様性が強調され、他方では、平等が説かれるといった矛盾した姿勢を呈している<sup>(10)</sup>。その混乱の中で、「人種主義」という言葉が、認識の道具というよりは闘争のそれとして機能している傾向が指摘され、その言葉の使用価値すら疑問視されている<sup>(11)</sup>。

そのような反人種主義陣営での混乱は、1989年に起こった「スカーフ事件」の際に露呈した。事件はクレイユ市の中学校で、イスラームの女性徒三人が

スカーフ（ヘジャヴ）を着用して登校したことに端を発し、政教分離をめぐる問題へと発展した。すべての政治勢力は、共和主義的伝統から演繹される差異の不承認（＝政教分離原則の堅持）と差異の容認（＝多文化主義の承認、同化主義の否定）の間で自己の立場を問われた。

例えば、社会党のロカールやシュヴェーヌマンらは共和主義的価値の擁護を主張し、イスラームの女性徒たちの「差異への権利」を否定し、NDのブノワは、自己の文化的差異を表現した少女たちの権利を擁護し、西欧の同化主義と普遍主義に対して「第三世界」の視点から批判している<sup>(12)</sup>。

以上のように、タギエフの人種主義－反人種主義の分類を手がかりに、FNやNDの人種主義の特質を概観し、フランスの人種主義－反人種主義の布置状況を確認した。以下の章では、FNとNDの差異主義的人種主義の特質を、具体的言説を通じて分析する作業に取り組んでみよう。

- (1) Taguieff (1987), pp. 311-410, 笠間 (1988年), 49-57頁, 梶田 (1992年), 231-4 頁。
- (2) Taguieff (1987), pp.173-5.
- (3) 2つのタイプの人種主義の理念型もしくはロジックは、現実には結合した形で現象し、相互に排他的なものではない[Wieviorka (1993), p.11, (1991), p.93, Silverman (1992), pp. 123-4.]。
- (4) Taguieff (1988), p. 51.
- (5) Policar (1992), p. 37.
- (6) Krikorian (1986), p. 179.
- (7) Benoist (1979), p. 230.
- (8) Taguieff (1988), pp. 20-1, 34.
- (9) Benoist (1986), pp. 216-7.
- (10) Silverman (1992), p. 94.
- (11) Taguieff (1989b), p. 75.
- (12) Silverman (1992), pp. 111-8.

## 第2章 人種主義的政治勢力の台頭

本稿のテーマである新しい人種主義＝差異主義的人種主義は、1968年に結成されたNDの理論的営為によって形成されていく。本章では、予備的作業として、1968年1月に臨時書記局が設置され、実質上発足するGRECE



(Groupement de Recherche et d'Etudes pour la Civilisation Europeenne)と、保守陣営への浸透をめざして1975年に GRECE のメンバーによって結成されたクラブ・ド・ロルロージュ Club de l'Horloge (=CDH) を中核とするNDと、1980年代に入って彗星のごとくフランスの政治システムに参入し、NDの理論的影響が見られるFNについて概観しておこう。

NDとFNは、そのイデオロギー的内容において独自性を持つてはいるが、人種主義に関しては多くの点で共通の言説も展開している<sup>(1)</sup>。即ち、1970年代に GRECE が、新人種主義の思想的基盤を整備し、GRECE から独立したCHDが保守の一部に新人種主義の論理と発想を浸透させ、1980年代には、FNが、反移民的言説として大衆的に普及させていったと要約しうる。

さて、NDは、アルジェリア独立反対闘争の挫折後、長らく低迷を続けてきた極右陣営の思想的再建をめざして結成された<sup>(2)</sup>。その思想的領袖であるブノワ<sup>(3)</sup>を始めとして、ヴィアル (P. Vial)、マルマン (M. Marmin)、ジュリアン (F. Julien) らの知識人を集めたNDは、極右の思想的実験室の機能を果たしていく<sup>(4)</sup>。

NDの思想のうち、新人種主義との関連で重要な要素を紹介しておけば、第1には、平等主義・普遍主義の否定である。

NDは、多様な姿で存在する現実を単一のモデルに還元するという意味で、平等主義的・普遍主義的思想に断固として反対する。彼らによれば、「多様性社会 la société de diversité」は不平等を当然の前提とする。

第2には、平等主義と普遍主義へのアンチテーゼとしての差異＝多様性の称賛である。

現代の大衆消費社会において、「差異」「多様性」といった言葉は多用されているが、NDは、左翼に対抗すべく「差異」のテーマを活用し、差異と多元主義の防衛者として自己呈示している。彼らは、そうすることで、政敵を不寛容な画一主義者として批判しえた。

差異＝多元性の称賛、平等主義と普遍主義の否定は、人種主義的立論に動員される時、彼らは自己を「民族差異主義者 thno-différentialiste」と規定し、民族的アイデンティティと文化の擁護者として呈示する。彼らにとって、同一の存在様式・リズム・生活水準などを押しつけることこそが人種主義な

のであった。

1979年には、メディアで、突然に、NDに対する関心が高まっていく。それは、1978年の国民議会選挙で左翼が敗北することで、左翼の保守攻撃の材料として使われたきらいはあるが、平等主義や普遍主義といった、従来は支配的であった価値観が揺らぎ始めていることも表現していた。

次にCDHであるが、1974年に、ル・ガルー (Le Gallou)、メグレ (B. Mégre) らによって結成された。CDHはGRECEとは違って、既成保守への浸透を重視し<sup>(6)</sup>、1979年以降はGRECEから組織的に離反し、独自の方向に進んでいる<sup>(9)</sup>。

CDHは、現実政治から超越し純粋な「思想結社」を志向したGRECEとは違って、保守陣営のための「思想の実験室」を自認していた<sup>(7)</sup>。彼らは、保守陣営のエリートを思想的に獲得することを目的として、グラン・ゼコール出身の官僚、大学人、自由業者などの中に浸透していき、左翼に対する知的戦争のマシンの役割を担っていた<sup>(8)</sup>。その意味では、彼らは、現実政治への関係では、GRECEよりも重要な役割を果たしていたと言える。

NDの思想は、CDHの媒介でRPR、UDFに浸透していた。彼らとUDFのバツソ (H. Bassot)、マドラン (A. Madelin)、ロンゲ (G. Longet) などとの関係が知られていたし<sup>(9)</sup>、グリオットレ (A. Griotteray) ポニアトスキ (M. Poniatowski) らの著作にも、ND思想の影響が色濃く見られる<sup>(10)</sup>。

1981年以降、保守陣営の言説の中は、反社会主義の方向で、フランスのアイデンティティの近代的神話と「外国の」共同体的差異の再活性化をめぐって、特に急進化が見られ<sup>(11)</sup>、NDの思想がその武器として動員されていた。

他にも、NDの思想は、保守系雑誌『フィガロ・マガジーン (FM)』を媒介に、大衆的に普及していく。『FM』誌の編集部には、ブノワ、ヴァラ、マルマン、デュラントンらが参加し<sup>(12)</sup>、『FM』誌は、実質的に、NDの論壇として機能していた<sup>(13)</sup>。

さて、最後にFNであるが、FNは、1972年に、極右陣営の中で「新秩序 Ordre nouveau」を母体に、合法路線に活路をもとめ、選挙戦への積極的な参加を志向する分子によって創設された。結成に際して、極右運動の古参関

志であったルペン (J.-M. Le Pen) が党首として担いだされた<sup>(14)</sup>。

FNは、1970年代には、内部対立を抱えて、各種選挙でも低迷を続けた。フランスの政治生活への参入という、彼らの当初の目標は達成されず、マージナルな存在を脱することができなかった。

ところが、1981年の左翼政権の成立を画期に、状況は一変していく。1983年の一連の補欠選挙で躍進の前兆を見せたFNは、1984年の欧州議会選挙で10.95%を得票し、一躍注目される。そして、1985年県議選、1986年国民議会選・地域圏議会選、1988年大統領選・国民議会選と、政治生活への定着を示し、今日に至っている<sup>(15)</sup>。

そのようなFNの躍進一定着をもたらしたのは、ルペンの指導者としてのカリスマ的魅力に負うところも大きいが、根本的には、1980年代になって、フランスで重要な政治的テーマとなる移民問題が作用していた。彼らは、移民問題に対して、移民＝失業＝犯罪といった図式を利用し、フランス社会の抱える諸問題の原因を移民へと転嫁した<sup>(16)</sup>。

FNの反移民的プロパガンダは、1970年代から、既に、その言説に含まれていた<sup>(17)</sup>。しかし、世論の中でFNの反移民的言説が支持を獲得し始めるのは、1980年代に入ってからのことだった。フランスが直面していた経済的・社会的困難は、外国人嫌いの世論を強化し、それは現在まで持続している。

即ち、1980年代に入ると、人種主義的動機による事件も急増していき、社会における外国人への反感の高まりが示されている(表2)。また、SOFRES調査によると<sup>(18)</sup>、フランスには外国人が多すぎると考える回答者が、1984年11月には61%に達し、90年5月でも54%を維持している。外国人の中でも、マグレブ諸国民とブラック・アフリカ諸国民については、それぞれ1984年5月には66%と41%、1990年5月には53%と36%の回答者が多すぎると考えている。若干は低下しているとはいえ、第三世界出身の移民への過剰感は一時的には改善されていない。同様に「あまりに異なりすぎて、移民の大部分はフランス社会に統合されないだろう」という回答は、1985年11月には42%であったものが、1989年11月51%、1990年6月49%と増加傾向を見せている。

そのような移民にとって厳しい世論の高まりに応じて、ルペンとFNの言説への支持者も確実に増加していった。1984年5月のSOFRES調査では、ル

表 2 1979年以降の人種主義の発展

年	人 種 主 義					
	反マグレブ的人種主義		他の人種主義		人種主義の合計	
	行 為	脅 迫	行 為	脅 迫	行 為	脅 迫
1979	8	3	0	4	8	7
1980	29	17	6	3	35	20
1981	20	14	3	9	23	23
1982	34	32	9	23	43	55
1983	65	81	3	15	68	96
1984	45	85	8	17	53	102
1985	50	91	20	7	70	98
1986	40	93	14	2	54	95
1987	39	66	7	11	46	77
1988	51	108	13	27	64	135
1989	44	188	9	49	53	237
1990	37	198	15	80	52	278
合計	457	976	107	247	569	1223

出典：Commission nationale consultative des droits de l'homme (1991), p. 15.

ペンに何らかのシンパシーを感じるものは18%であったが、RPRの支持者では37%、UDFの支持者でも24%に達している<sup>(19)</sup>。「誰が最善の解決法を提起しているか」という設問に対しても、1985年には5位（12%）であったルペンのランクは、1989年11月には1位（17%）、1990年9月には3位（14%）と、彼への支持は持続している<sup>(20)</sup>。

FNの反移民的言説には、差異やアイデンティティの尊重、フランス人の優先など、ND知識人が作りあげてきた人種主義的イデオロギーの影響が見られる<sup>(21)</sup>。1970年代にNDのイニシャティヴのもとで台頭した差異とアイデンティティを重視する新人種主義は、FNによって反移民のイデオロギーとして活用され普及していったと言える。

また、新右翼とFNの間には、人的関係も存在していた。FNの知識人の多くは、GRECEやCDHからの移籍組からなり、彼らはイデオロギー面でFNに貢献している。CDHからはプロ（Y. Blot）、メグレ、GRECEからはヴィアル（P. Vial）、ヴァランヌ（J. Varenne）-元GRECE総裁、コルニック

(B. Collnisch) アントニー (B. Antony), ノタン (B. Notin) —ND 系の雑誌『ヌーヴェル・エコール』誌編集委員, マルチネ (J.-C. Martinez), ホードリ (J. Haudry) らが FN に参加している<sup>(22)</sup>。

また, 1990 年の FN 代議員を見ても, 1002 名の代議員中, GRECE は 26 名 (2.6%), CDH は 21 名 (2.1%) を送り込んでおり<sup>(23)</sup>, ND 知識人が FN の活動に加担していることが確認しうる。

FN の他にも, ND の人種主義の教義とイデオロギーは, 「第三の道 *Trois-sième Voie*」 「防衛連合グループ *le Groupe union défense (GUD)*」 「ヨーロッパ・ナショナリスト・フェッソー *les Faisceaux nationalistes européens (FNE)*」などの極右団体<sup>(24)</sup>や, より間接的ではあるが, ユダヤ人虐殺やガス室の存在を否定する「修正主義者 *révisioniste*」潮流の中に見出される<sup>(25)</sup>。

以上のように, 世論の追い風を受けながら, ND, FN を中心に, 保守陣営と極右陣営にまで影響を広げた, 人種主義的立論において発想と言説を共有するネットワークが生成・発展していることが確認しえた。さて, 次章以下では, 彼らの提示する新らしい人種主義の思想的特質を明らかにしていこう。

- (1) Camus et Monzat (1992), p. 29, Taguieff (1984c), pp. 158-62, Rollat (1984), pp. 157-62, Harris (1990), pp. 84-5.
- (2) ND についての詳細は, 畑山 (1991) 参照。なお, ND という場合, 組織的には分離し, イデオロギー的にも相違点もあるが, GRECE と CHD を一つの人的ネットワーク, 思想的潮流として扱っている。
- (3) ブノワは GRECE を離れて, 1988 年には雑誌『クライシス *Krisis*』を発刊した。開放とテーマの多様性という姿勢にもかかわらず, それは, やはり新右翼の雑誌であった。[Bourseiller (1991), p. 106.]
- (4) Bourseiller (1991), p. 96.
- (5) Bourseiller (1989), p. 180.
- (6) Cambell (1986), p. 50. CHD は, 1979 年に「新共和主義者 *Les Nouveaux Républicains (=NR)*」を結成した。NR の結成は, GRECE からの CHD の離反を意味していた。[Taguieff (1985a), pp. 92-3.]
- (7) Taguieff (1985a), p. 87.
- (8) Rollat (1984), p. 157.
- (9) Taguieff (1988a), p. 49.
- (10) ポニアトスキの著書 [*L'Avenir n'est nulle part*, Albin Michel 1978] の第 7 章

「インド・ヨーロッパ語族，白人西欧社会の起源」は，NDの社会・歴史観の引き写しであり，グリオットレの [*Les immigrés: Le choc*, Plon, 1984] も，同化不可能な移民が失業や社会的負担をフランス社会に課しており，彼らの帰国が必要であることなど，FNなどの主張と類似した内容である。彼の著作では，CHD から後に FN に加入するル・ガルーの執筆への協力に対して謝辞が述べられている。

- (11) Bonnafous et Fiala (1986), p. 95.
- (12) Taguieff (1988b), p. 93.
- (13) Brunn (1979), p. 171.
- (14) FNの形成・発展とルペンについては畑山 (1989)，同 (1990) を参照。
- (15) Taguieff (1991a), p. 41, Ford (1992), pp. 20-5, Perrineau (1993), pp. 243-98.
- (16) 畑山 (1993) 参照。
- (17) Laux (1974), pp. 87-8.
- (18) Le Gall (1991), pp. 126, 128.
- (19) Schain (1988), p. 612.
- (20) Joffrin (1990), p. 11.
- (21) Harris (1990), pp. 84-5.
- (22) Plenel et Rollat (1992), pp. X, 216, Monzat (1992), p. 226, Rebérioux (1991), p. 49.
- (23) Birnbaum (1992), p. 252.
- (24) GDU は1968年に結成され「新勢力党 Parti des Forces nouvelles」や「第三の道」に加入しながら，現在は自立を守っている。FNE は1980年に結成され，1989年には，月刊『ノートル・ユーロップ・コンパタン』の発行以外は，その活動はほぼ停止している。「第三の道」は，1985年に結成され，スキンヘッズへの浸透や海外の極右団体との連携にもエネルギーを注いでいる。彼らは「革命的ナショナリスト」を名乗り，『第三の道』『ヨーロッパ革命』といった機関誌を発行している。[Commission nationale consultation des droits de l'homme (1991), pp. 28-9.]
- (25) Wieviorka, pp. 39-40.

### 第3章 国民的アイデンティティの擁護—危機のフランス

1980年代のフランスは，外側からは，超国家的ヨーロッパ統合の進展，湾岸戦争時のアメリカのヘゲモニー，強力な統一ドイツの出現によって，フランスという国民国家の国際的地位とヘゲモニーが脅かされており，国内では，移民の存在が，「単一で不可分」の国民イメージへの重大な挑戦をもたらしていた。そのような文脈で，国民の中には，自国の将来とアイデンティティへ

の不安が形成され、「フランスのアイデンティティ防衛」が、政治論争の中心的テーマへと浮上していった<sup>(1)</sup>。

そのようなアイデンティティをめぐる議論を、移民排斥へと利用していくのが、FNなどの極右勢力であった。移民の「侵入」=国民的アイデンティティの危機という彼らの言説は、不法滞在・就労移民の増加、特に、非ヨーロッパ系移民をめぐる世論の硬化を背景に、世論に受容されていく。

国民は、独自の歴史や文化をもった共同体として存在するが、それが、異分子の侵入によって危機に瀕しているという不安が、国民的アイデンティティへの彼らのこだわりの背後に存在していた<sup>(2)</sup>。

そのような国民共同体が、移民の存在によって脅かされている根拠として、次のような諸現象が援用されていく。

第一には、移民の数の増加、特に、不法入国・滞在移民の増加という現象が脅威の根拠とされている。

フランス在住の合法移民の数は内務省統計によれば、1982年4,459,068人、1986年4,453,765人である<sup>(3)</sup>。しかし、それ以外の公式統計には計上されない非合法移民の数は、正確には分からない。そこから、非合法移民への不安が生じるわけである。

世論調査でも、国民は、フランスには移民が多すぎると感じているという結果がでており<sup>(4)</sup>、客観的で正確な移民の数に基づく数字よりは、反移民的言説にとっては、フランスに移民があふれているというイメージが重要であった。すなわち、国民が、街頭や喫茶店、学校、病院などで経験する移民との接触の実感が、移民排斥の言説を受容させた。

ルベンは、1974年以来、フランスに入国した外国人労働者の数を130万と見積もり「1974年以来、国境の閉鎖の日から、90万の移民が入国している。それは“公式の”移民が問題であるにすぎず、それに続く20万の“政治難民”と、少なくとも近々の“合法化”を待つ同じだけの非合法移民を加える必要がある」と移民の増加を強調している<sup>(5)</sup>その数字に確たる根拠があるわけではなかったが、数字の正確さと一貫性は彼の本質的関心ではなかった<sup>(6)</sup>。

第二に、その数字的圧迫感を背景に、移民の存在がフランス社会・経済に及ぼしている弊害が喚起され、極右によって国民生活への脅威の根拠として

援用されている。

学校・失業・社会保障の領域で、移民の大量の存在が、犯罪の増大、公共住宅の不足、教育の混乱、失業の増加、社会保障財源の逼迫といった現象の元凶として説明されている。可視化した移民の存在は、社会問題化していく<sup>(7)</sup>。

また、フランス文化の衰退、テロリズム、テクノロジーの遅れも、移民との関連で語られている<sup>(8)</sup>。そして、それらの一連の問題は、マグレブ系移民の存在へと集斂されていく。

第三に、移民への不安には、フランス人の中にある人口的強迫観念も作用していた。即ち、フランス人における人口減少は、非ヨーロッパ系移民の高い出生率と対照的であった。そのことから漸進的な物理的・文化的代替、混雑によるフランスのアイデンティティの消滅というイメージが喚起される<sup>(9)</sup>。

例えば、ルペンは、最も深刻な脅威は、ヨーロッパと第三世界との間の人口的なアンバランスであると断言し<sup>(10)</sup>、家族呼び寄せによる、伝統的に多産な移民家族の流入によって、フランス人は自分の国で少数派にならざるえないと、フランスの人口的水没や第三世界出身者によるフランスの「乗っ取り」といった危険性に言及している。「数年のうちに、現在わが国にいる600万人の移民は2～3倍に増える危険性がある。間違っていない。問われているのは、フランス人の存在そのものである」<sup>(11)</sup>と警告が発せられている。

FN以外でも、CDHは、フランス人やフランス在住のスペイン人女性の出産数が1.6～1.8人の時、イスラーム女性は4.5～5.5人を出産していると同様の危機感を示している<sup>(12)</sup>。

つまり、極右は、人口的逆転によって、フランスが、旧いヨーロッパの国からアフリカ・アジアの国になりつつあり、白人は少数派に転落してしまうと訴えるのだった<sup>(13)</sup>。

第四に、移民への反感・不安は、非ヨーロッパ系移民のもつ「同化」不可能性も根拠にしていた<sup>(14)</sup>。

戦前以来、フランスの移民労働者は、イタリアやスペイン、ポーランドといったヨーロッパ諸国から供給されていた。しかし、1960年代に入ると、急速に非ヨーロッパ系の移民、特に、マグレブ諸国からの移民が増大していく。



そこから、「同化」可能なヨーロッパ系移民—「同化」不可能な非ヨーロッパ系移民という二元的図式が利用される<sup>(15)</sup>。

即ち、フランス人と文化や伝統が近いヨーロッパ系移民は、学校教育を中心的手段として容易に統合されていったが、フランス人の文化や伝統と根本的に違うマグレブやトルコ、ブラック・アフリカからの移民たちは、フランス社会への同化は不可能と診断されている<sup>(16)</sup>。

「同化」不可能性の最大の根拠とされるのが宗教の問題であった。つまり、マグレブ系移民の同化不可能性は、そのイスラームの宗教的独自性にあった。世論の中にあるイスラームへの違和感・偏見が動員される。

CDH にとっては、イスラーム＝「暴力に大きな役割を与えている宗教」「他の宗教への軽蔑、弾圧が特徴の宗教」「明らかに奴隷制度を認めている宗教」「女性への劣等視と軽蔑を制度化した宗教」「個人と社会の生活をコード化する宗教」であり、「進歩の否定」「精神の自由の禁止」を意味していた<sup>(17)</sup>。

また、フランスの国土で2つの根本的に異なった宗教が衝突している、とルペンも断定している。彼によれば、既に、フランスで第二の宗教になったイスラームが、すべての同化に対立し、フランス固有のアイデンティティ、西欧キリスト教文明を脅かしている<sup>(18)</sup>。

結局、現代の新人種主義では、フランスは異質な分子の大量の「侵入 invasion」にの脅威に瀕しているとイメージされ、フランスとヨーロッパの陥っている黙示録的「デカダンス」が告発されている<sup>(19)</sup>。

フランス社会への「異物」の侵入は、国の非活性化、国民のアイデンティティの喪失を意味していたし<sup>(20)</sup>、「自然が真空を実際に恐れるように、ヨーロッパ諸国民は外国の諸国民のよって急速に取って代わられ、飲み込まれてしまうだろう」(ルペン)<sup>(21)</sup>と恐れられた。

以上のように、「非ヨーロッパ系の外国人」は、フランスのアイデンティティにとって危険であるという定式<sup>(22)</sup>が、人種主義的立論の出発点にあった。故に、彼らにとってアイデンティティの保全こそが最重要の課題であった。

例えば、FNのプログラムには、アイデンティティへのこだわりが端的に書きこまれている。

「第一の準拠原則は、アイデンティティ、即ち、本質的価値の原則である。

そのアイデンティティを喪失し、自身が何物で、どこから来たのか、何をもっているのかを知らない国民は、隷属や抑圧による以上に、確実に死を宣告された国民である」<sup>(23)</sup>

ただ、彼らの巧妙さは、第三世界的立場を装って議論を進めていることである。移民の帰国は、決してフランス人の利己的行為ではなく、「差異への権利」の論理的帰結であり、移民の集団的アイデンティティも配慮するものと立論されることである<sup>(24)</sup>。

「もし、F Nが、移民と闘っているとしても、それは極めて発展しているが故に脆弱な我々北の社会を保全するためだけではなく、同様に、南の国の青年を唯一存在する希望の道から逸脱させないためでもある」<sup>(25)</sup>「移民の母国への送還は、南と北の利益になる措置である」<sup>(26)</sup>といったルペンの発言や「移民は、受入れ国の文化だけでなく、移民のアイデンティティを傷つけるから非難されるべきである」<sup>(27)</sup>というブノワの指摘に、第三世界諸国民のアイデンティティと利益を援用することでの自論の正統化が見られる。

以上のように、移民の存在が、フランスの国民共同体に脅威を与え、国民的アイデンティティが解体の危機に瀕し、国民は分裂に瀕しているという煽動は、国民の中にある不安を刺激し、彼らの言説は浸透していった。そして、国民的アイデンティティの擁護者としての自己呈示は、国民の中の、外国人の存在と弊害に危機感と嫌悪感を抱く部分の共感を獲得するのだった。

(1) Lipiansky (1991), p. 255, Rémond (1993), pp. 52, 77-8.

(2) 「国民は、その多様性において生まれ、生活し、死んでいく地理的環境に適合した役割を有している。また、歴史的進化の成果でもある。個人と同様に、国民は、その過去、起源、固有の性格、特有の運命をもっている」というルペンの国民観が、彼らの共同体主義的国家観をよく示している。[Le Pen (1989), p. 22.]

(3) Taguieff (1991a), p. 136.

(4) 第一章参照

(5) Le Pen (1985), p. 242.

(6) Taguieff (1991a), p. 135.

(7) 畑山 (1993) 参照。

(8) Wenden (1988), p. 332, Birnbaum (1992), p. 297.

(9) Taguieff (1985a), p. 178.

(10) Le Pen (1984), p. 163. 「もし、我々が生存空間を占拠しなければ、もし我々が、

フランスでフランス人の子供を作らなければ、子供を作りフランスの領土を所有するのは他者である」[Le Pen (1985), p. 170.] と、ルペンは人口論的危機感をしばしば表明している。

- (11) Mayer et Perrinau (1989), p. 217. 極右系の『ミリタン』紙での「そのような現実（フランスのアジア・アフリカ化＝筆者）を確かめるためには、それが今だに可能であるなら、大都市と郊外を散歩するだけで十分である。そこは、ダカルやアビジャンではないにしても、もはやパリやリヨン、マルセイユではない [……] フランスにおけるアフリカやアジア出身者のおよそ300万人は、わが国民の生物学的特性を、根本的かつ不可逆的に変えるには十分である」（1983年11月号）といった主張や [Taguieff (1985c), p. 170], 「フランスのパスポートは黒いアフリカ人を白いヨーロッパ人に変える特性を持つてはいない。[……]単純に、我が国民の生死が問題なのだ。[……]引き延ばしや姑息な手段、誤った手段をとっている時ではない。何故なら、明日では、もはやフランス人は存在しないからである」といった言説 [Taguieff (1987)] にも、ルペンと同じ発想が見受けられる。
- (12) CDH (1985), p. 247.
- (13) 極右の中には、有色人種の侵入によって脅かされている「白人のヨーロッパ」「アジア・アフリカ化」という強迫観念が存在している [Taguieff (1985c), p. 171.]。例えば、ND シンパの L・パウエルの「真の問題は、もし白人が、絶望によって、その文明・生活世界への自信の喪失によって、その人口の更新を確保しえないという事態が続けば、1972年に地球人口の25%であった白人は2075年には12.8%しか占めないことになる」といった発言がその典型である。[Pauwel (1979), p. 137.]
- (14) Silverman (1992), pp. 72-3, 81. 例えば、CHD が、1985年に発刊された『移民問題への回答』の中の「移植が成功するためには、移植される側と提供者の間の同一性が一致する必要がある」が、移民とフランス人の間には、文化・歴史・宗教・言語の面での一致がない。故に「移民の『編入』は、フランス国民と同様に外国人のコミュニティも、少しづつ固有の性格を規定する本質的価値の喪失という恐ろしい相互の貧困化と引き換えでしか、歴史において存続しえないような文化的全体へとフランスを変えてしまう」といった発言が、「非同化性」援用の論理をよく示している [Taguieff (1987), p. 346]。
- (15) Taguieff (1985c), p. 174.
- (16) 世論も移民の統合に対して悲観的見解を表明している。SOFRES の調査によれば「フランスで生活する移民の大部分は統合されうるし、それは時間の問題である」という回答は、1985年11月-50%、1989年11月-42%、1990年6月43%と低下している反面、「移民の大部分は、あまりに異なっているから、フランス社会には統合しえない」という回答は、42%、51%、49%と高い割合を呈している [Le Gall (1991), p. 122.]。極右の「同化不可能性」の主張は、フランス社会では決して少数意見というわけではなかった。
- (17) CDH (1985), p. 208.

- (18) Le Pen (1985), p. 218.
- (19) ルペンによれば「ヨーロッパ社会は、今世紀は社会的分裂、思想と価値の混乱、構造・ヒエラルキー・モデルの再審、精神と風俗の壊乱といったデカダンスに向かっている」[Le Pen (1989), p. 12.]。
- (20) Haghghat (1988), p. 233. 「侵入者 envahisseurs」という用語は、フランスのアイデンティティへの危険性を意味する基本的用語である [Taguieff (1991), Tome. 1, p. 22.]。例えば「そのような基本的規則をもはや尊重しない国民は侵入者によって歴史から一掃される」[Le Pen (1985), p. 85.]。
- (21) Le Pen (1989), p. 14.
- (22) Bernstein (1990), p. 181.
- (23) FN (1993), p. 36.
- (24) Le Pen (1989), p. 34.
- (25) Le Pen (1989), p. 43.
- (26) Milza (1988), p. 166.
- (27) Birnbaum (1992), p. 319. 「新右翼は、結成以来、何度も、ヨーロッパと第三世界の連帯、差異への権利と諸国民の大義に組し、すべての形態の不寛容、全体主義、人種主義への反対を表明してきた」(ブノワ)と、NDは、第三世界主義的立場をアピールしている [Haghghat (1988), pp. 189-90]。

#### 第4章 差異の擁護としての人種主義

極右の国民的アイデンティティの擁護を前面に掲げる論理は、自己の有する文化的・歴史的独自性の保全・強化、換言すれば、他の共同体に対する自己の差異性の擁護として展開される。

差異と文化的個性の強調は、対外的には、他の共同体との区別の強化、対内的には、自己の共同体の純粋性の強化として、排外主義的・人種差別的方向に作用するが、問題は、それが、近代がもたらした平等主義と普遍主義の支配に対して、差異とアイデンティティという極めて現代的な価値観を対抗させることで展開されていることである。

即ち、第一章で確認したように、現代においては、二つのタイプの人種主義が存在しており、一つは、人種と文明に関する価値の普遍的尺度の存在を前提とするタイプであり、もう一つは、NDやFNのような差異や集団的アイデンティティを絶対とするタイプである<sup>(1)</sup>。

従来、人種主義は、本質的に、普遍主義の強制、差異の拒絶として定義しうると信じられてきたし<sup>(2)</sup>、それは、人種間の不平等の立場に還元されると思われてきた<sup>(3)</sup>。

ところが、70年代のNDによる理論的作業によって、人種主義は、エスノセントリックな一元論からエスニックな多元論へと重心をシフトしていく。つまり、人種の優越への崇拜から純粋な差異もしくはアイデンティティの純粋性への崇拜へと論理の組替えが進行する<sup>(4)</sup>。

その先駆者である GRECE は、国民・民族・文化の差異の尊重を前面に出し、「異質嫌い」としての人種主義というスタンダードな定式を覆していった<sup>(5)</sup>。つまり彼らの議論においては、従来の人種主義の基本的イメージが変容されていったのであり、人種からエスニシティ、文化へ<sup>(6)</sup>、不平等から差異へ、差異への嫌悪から差異の尊重へと、人種主義の概念的軸は移されていった<sup>(7)</sup>。

そして、人種主義の本質と見做されていた劣等者への公然とした蔑視は、他者との接触への強迫観念、混血への嫌悪に席を譲った<sup>(8)</sup>。差異主義的人種主義は、接触への強迫観念と混淆の恐怖に立脚している。何故なら、文化的差異の維持は混淆の回避を意味しているからである<sup>(9)</sup>。

そのような転換の有効な武器になったのは、1968年の「5月革命」に由来し、抑圧された少数派とその“文化的権利”の擁護を意味する「差異への権利」という概念であった。それは、当初は、脅かされた国民的アイデンティティを擁護し、文化的・民族的差異を正当化するイデオロギーとして機能していたが、1980年代には右翼の側で援用されるようになった<sup>(10)</sup>。即ち、もし、各文化が自己保存の神聖な権利、つまり自己防衛権が与えられているとすれば、その原則は、同じくフランス文化にも適用されるという方向に読み変えられいった<sup>(11)</sup>。

さて、差異に関する言及を極右の言説の中から拾ってみれば、ルペンは、「人種主義的相違の間にある差異の決定的縮小に向かう全般的混血と、下からの平準化を地球上に実現することを狙う『世界主義』を称賛する一種のユートピア的潮流が存在する [……] それは、非難されるべき愚かなことである。何故なら、人種はその多様性において神によって創造され、そのことに

よって、確かにその存在理由を持っているからである」と差異の擁護を掲げている<sup>(12)</sup>。

差異の絶対化は、NDの言説においても中心的要素である。文化・精神構造・風俗・共同体の伝統の非還元性・比較不可能性・コミュニケーション不可能性・絶対的分離が、彼らの基本的視点であり<sup>(13)</sup>、共同体間の差異を当然の前提にしていた。

例えば、GRECE のファユ (F. Faye) は「差異への権利を突き詰めると、多民族社会を拒絶し、移民に関しては、その帰国を考えることが望ましい」<sup>(14)</sup>と「差異への権利」を援用している。

同様に、ブノワも「差異への権利の確立は、左翼に広がっている《人間の友愛》を差異の消滅、文化の破壊、共同体の同質化の上に実現されると信じている誤謬と、右翼に広がっている、国民に他の国民への拒絶の態度を教え込むことで《国民の蘇生》を信じる誤謬、という二重の誤りを回避する唯一の方法である」と、「差異への権利」を擁護している<sup>(15)</sup>。

ネオ・ナチ的極右にも、差異の肯定は共有されている。FANE<sup>(16)</sup>の機関紙『ノートル・ユーロップ』で、シャルル (L.J. Charles) は次のように述べている。

「精神的差異は、必ず保全されねばならない。というのは、それは、共同体と同様に個人の均衡の条件である。人種を別々に発展させるのは、最も寛容なことである。われわれは、全ての混血の絶対的拒絶と分離的發展の原則に立脚した人種の良い相互理解を追求する」<sup>(17)</sup>

彼らの差異の称賛は、差異を消滅させるものとしての普遍主義と平等主義への否定的評価につながっていく<sup>(18)</sup>。

第一に、彼らは、差異を破壊するものとして普遍主義を告発する。彼らにとっては、一つの普遍的なものの存在を前提とすることこそが人種主義であり、それに対しては、諸文化と人種の多様性を前提とした発想が対置される<sup>(19)</sup>。

例えば、NDによれば、普遍主義は聖書の普遍主義の産物で、人間の多様性を弱体化させる一神教的イデオロギーに由来するものであり、還元主義的で生物的・文化的な多様性に敵対する人種主義を育むものだった<sup>(20)</sup>。

普遍主義は、同質化と画一化、平準化をもたらし、独特のものを普遍的規範に流し込むマシンとして嫌悪される。故に、平準化指向的な反人種主義は、大衆の文化的殺人、民族絶滅を意味していた<sup>(21)</sup>。

次に、平等思想への攻撃であるが、平等主義も差異の否定として告発される。不平等は「現実」の属性であり、平等主義は平準化のイデオロギー、世界からの多様性の排除であり、幻想であり、誤ったユートピアであると攻撃される<sup>(22)</sup>。

「敵、それは平等主義の一形態を代表し体現する全ての教義と実践である」(ヴァラ)<sup>(23)</sup>、「私にとって右翼は、実際は平等主義の拒絶である。それは、右翼の基本的定義である」(ブノワ)と断言されているように<sup>(24)</sup>、NDにとって平等主義は反自然的なものであり、社会を退廃に向かわせ、最良のものを平準的レベルに押し下げ、個性の解体や自由の破壊をもたらし、政治的専制を生み出すものだった<sup>(25)</sup>。

CDH も、反平等主義を得意のテーマとしていた<sup>(26)</sup>。彼らにとって、平等主義の到達点は平準化であった<sup>(27)</sup>。社会権と政治的権利におけるフランス人と移民との間の平等という要求は、一つのフィクションでしかなく、平等主義は、聖書に由来するイデオロギーであり、本来のヨーロッパ精神とは無縁のものであった<sup>(28)</sup>。

平等主義は神話であり、馬鹿げたことと断言するルベンも、平等主義への攻撃の合唱に加わっている。

「アフリカの部族が、どんな白人も凌駕しえない競走のチャンピオンを輩出したことを自負し、音楽のような他の分野で、アメリカの黒人グループが、まさしく、黒人霊歌と呼ばれる類いなき多声音楽を誇っているが、科学とテクノロジーの分野は、それらの民族も、一般には、白人ほどは得意ではない。人々は、優秀と劣等とは簡単には性格づけられないし、彼らは異なっている。だから、身体・文化上の差異を考慮に入れるべきである」<sup>(29)</sup>。「我々は、公正には賛成だが、平等には反対である。平等主義のテーマは、我々にはデカダンスであると思える」<sup>(30)</sup>。

結局、彼らにとって「全ての平等主義的・普遍的イデオロギーは、全ての精神的・社会的現実を単一のモデルに還元しようとするが故に、必ず全体主

義的」なのであった<sup>(31)</sup>。

さて、新人種主義にとって、「差異」とともに重要な概念は「文化」であった。即ち、人種から文化への転換、人種の純粋性から「真の」文化的アイデンティティへの置き換えが生じている<sup>(32)</sup>。彼らによって、文化的差異こそが、自然で生来の差異と扱われている<sup>(33)</sup>。

従来、人種主義の通常の意味は、個人のその人種主義的起源への還元し、個人の遺伝的・生物文化的帰属との一体視、人種に関する自然的（もしくは生物的）不平等の理論への参照、支配の正当化、軽蔑・憎悪・排除・迫害・絶滅への指向といった態度として定義されてきた<sup>(34)</sup>。

ところが、彼らの人種主義は、特定の人種の優越性の自明性に立脚するものではなく、「国境消滅の有害性と生活ジャンルや伝統の非両立性」「文化的差異の非還元性」に立脚する「人種なき人種主義」と言える<sup>(35)</sup>。つまり、新人種主義においては、従来支配的であった人種間の不平等の公理から、文化間の差異の絶対的明証性への重心移動が生じている<sup>(36)</sup>。

例えば、NDのブノワは、文化が時空の中に位置しており、普遍的なものではなく、相互に異なった個別の文化しか存在しないと、その多様性を当然視し、文化は言語的・国民的・地理的・民族的特殊性を刻印しているものと見ている<sup>(37)</sup>。

さて、差異の絶対化からは、従来の人種主義のように搾取や支配ではなく、分離や排除の正当化が結論づけられるが、差異の概念は、実際には、「同化しえるもの」と「同化しえないもの」の識別・差別の理論装置として機能している<sup>(38)</sup>。

例えば、NDは、自己を「民族一差異主義者 ethno-différentialiste」と規定し<sup>(39)</sup>、直接には人種間の不平等を主張してはいない。しかし、彼らは人種間のコミュニケーションの不可能性を言うことで、結果的にはアパルトヘイトを認めることになる<sup>(40)</sup>。

結局、差異の人種主義的称賛を特徴とする、差異原理に立脚する人種主義は、民族間の差異保全が至上命令である。そこから、生来、異なるものは異ならせておけば十分という、異なった共同体の分離が結論づけられる<sup>(41)</sup>。即ち、彼らの主張は、異なった文化間の接触回避、分離による発展、すべての



「文化の交差」の拒否<sup>(42)</sup>という、コミュニケーションの回避・拒否に帰結し、異なる他者の排除に行き着くのだった。

以上のように、彼ら「差異主義的人種主義者」は、不平等から差異へと人種から文化へと、従来の人種主義イデオロギーの軸を移動させ、自らを寛容な「差異への権利」の擁護者として呈示した。そして、差異の尊重を根拠に、平等主義・普遍主義といった、従来は反人種主義陣営が武器としてきた理念を、全体主義に行き着くもの、差異と多様性を圧殺するものと攻撃するのだった。また、差異と文化的独自性の強調は、コミュニケーション不可能な他文化との接触回避・拒否、排除へと帰結するのだった。

(1) Taguieff (1988), p. 46.

(2) Balibar (1989), p. 7.

(3) Taguieff (1985b), p. 72.

(4) アイデンティティ＝差異の無条件の保全は、1970年代にNDによってつくり出された差異主義的人種主義の中心命題であった [Taguieff (1985a), p. 91.]。

(5) Taguieff (1987), pp. 331-2.

(6) Guillaumin (1991), pp. 9, 12, Duranton-Crabol (1988), p. 81, Taguieff (1988), p. 34.

(7) Taguieff (1987), p. 14, Krikorian (1986), p. 179. 次のようなルペンの発言は、差異主義者としてのFNの特徴をよく示している。「異なった人種、民族、文化が存在しているこの世界では、私はそのような多様性や変化に富んでいることを確認するが、勿論、人間や人民、国民を区別する。私はスイスがアメリカと同じ大きさだとは言えない。何故なら、それは現実に反するからである」[Le Pen (1984), pp. 167-8.]。さて、「差異」の問題については、わが国でも議論されている。江原由美子氏は、アルベール・メンミの「差別主義」をめぐる定義に触れつつ、差異と差別の関係を論じている。彼女は、「差別」は「差異」を根拠にしないとして『『差異』の定式化はむしろ、『差別』という現象を説明し、論理化する『差別の論理』の装置であるにすぎない』と指摘している [江原 (1985年), 61-97頁]。他にも菅孝行、花崎阜平の両氏による議論でも「差異」の評価が問題になっている。菅氏は「人間なるもの」の尊厳とか「人間性一般」の価値を説いて、個別の差異の権利づけを行わない人間観によっては差別は克服されないと論じ、差異の固有性を擁護している [菅 (1986) 参照]。花崎氏は、「同一性と差異」のカテゴリー設定そのものが、差別者一被差別者関係における差別者の意識と論理のワナであると説いている [花崎 (1993), 158-62頁]。

(8) Policar (1992), p. 50.

- (9) Taguieff (1990), p. 118.
- (10) Taguieff (1989), p. 25, idem. (1990), p. 113, Silverman (1992), pp. 89, Marcicourt (1993), pp. 38-9.「差異への権利」の理念はその曖昧性から、反人種主義的内容にまで意味転換されていったのだが、極端な場合には次の発言に見られるように、ネオ・ナチ派によって国家社会主義への擁護にまで行き着く。「国家社会主義的人種主義は人種の防衛であり、固有のオリジナリティにおける全ての人種の保護である。[……] 問題は、もはや『劣等性』『優秀性』の用語ではなく、必ず保全されるべき精神的差異の用語で提示される。何故なら、それは共同体と同様に個人の均衡の条件だからである。人種が分離して発展するに任せることが最大の寛容である。我々の人種主義は、人種の尊重であり他者の尊重である。[……] 国家社会主義者として我々は、全ての混血の絶対的拒絶と分離による発展の原則に立脚した人種間の良好な相互理解を追求する」[Taguieff (1987), pp. 335-6]。
- (11) 「我々は、自己のパーソナリティを防衛する権利を有するだけではなく、義務も持っている。我々も異なる権利を持っている」(ルベン) [Taguieff (1989c) p. 181.]
- (12) Taguieff (1989c), p. 181.
- (13) Taguieff (1991a), p. 33.
- (14) Taguieff (1987), p. 336.
- (15) Benoist (1993), p. 25.
- (16) 「民族・ヨーロッパ行動連合 Fédération d'action nationale et européenne (= FANE)」は、1966年に結成された、過去30年間のフランスで最も重要なネオ・ナチ運動である。その立場は、非エタティズム的社会主義、ヨーロッパの白人の連合、議会主義の廃絶、「シオニスト」の経済的利害に向けられた反資本主義などに要約しうる [Camus et Monzat (1992), pp. 46-49]。
- (17) Taguieff (1985b), p. 70.
- (18) Apparu (1979), p. 96.
- (19) Wieviorka (1991), p. 91. 彼らの平等主義・普遍主義への攻撃は、差異の消去を根拠にしていた。ルベンの次の発言が、そのことをよく示している。「年齢・性別・国民を平準化する平等主義的運動は、私の見解では、非難されるべきである。何故なら、それは現実を隠すからであり、現実是不平等なものだからである」[Apparu (1979), p. 179.]。
- (20) Taguieff (1990), p. 118.
- (21) Taguieff (1987), p. 37. 普遍主義、世界主義、国際主義といった曖昧なイデオロギーは、世界の多様性を考慮せず、ファシスト的・マルクス主義的全体主義につながる全体主義の諸形態であると、ルベンも普遍主義を否定している [Le Pen (1984), p. 185.]。
- (22) Taguieff (1989c), p. 178.
- (23) Taguieff (1984d), p. 37.
- (24) Aron (1979), p. 235.

- (25) Haghigat (1988), p. 220.
- (26) Rollat (1985), p. 158.
- (27) Abet et Sajous (1986), p. 162.
- (28) Taguieff (1985c), p. 176.
- (29) Le Pen (1985), pp. 156-7.
- (30) Le Pen (1984), p. 183.
- (31) Marchard (1977), p. 84. NDによれば、普遍主義の具現は、リベラリズム、マルクス主義、キリスト教であった [d'Appollonia (1988), pp. 323-4]。彼らは、唯一の普遍的真理の存在を信仰するユダヤ・キリスト教以降のイデオロギーを批判し、それが全体主義につながることを批判している。彼らは、キリスト教支配以前の多元的価値が共存していた多神教的社会をモデルとし、差異の尊重を擁護している [畑山 (1991) 参照]。
- (32) Taguieff (1987), p. 14, Policar (1992), p. 50.
- (33) Taguieff (1985c), p. 175.
- (34) Taguieff (1991a), pp. 21-2. 文化やアイデンティティへの重心の移動にもかかわらず、新人種主義の中には生物学的な要素も存在していた。FNの言説の中には「適者生存」「生存競争」といった社会ダーウィニズムのテーマが見られる [Taguieff (1989c) pp. 186-8]。そのことは「人間の進歩は闘争、淘汰に由来する。[……] 人間生活のいわば相対的レベル・アップを可能にしたのは、最良で最高のもの、良質なものをめざす努力である」といったルペンの主張に端的に表れている [Le Pen (1984), pp. 183-4.]。同様に、NDの言説にも遺伝学、動物行動学、社会生物学の援用が見られ「生物政治 bio-politique」が重視されている [Duranton-Crabol (1988), pp. 76-9, Haghigat (1988), p. 193, Hourdin (1980), p. 33]。また、彼らにも、社会ダーウィニズムの影響が色濃く見られる [Taguieff (1984c), pp. 119-20, Aron (1983), p. 981.]。
- (35) Taguieff (1988a), p. 100.
- (36) Taguieff (1989b), p. 77.
- (37) Benoist (1979), p. 216. プノワは「文化は国民の身分証明書と言える。それは、国民の精神的呼吸であり、心の糧であり、運命の形をした未来へのパスポートである」と文化の重要性を強調している [Benoist (1986), p. 215.]。
- (38) 新右翼においては「文化」という言葉が、差異を正当化する道具として使われている。彼らにとって、移民は、その文化的伝統がヨーロッパのギリシャ・ローマ以来の伝統と根本的に無縁であるが故に、同化不可能な存在なのであった [Taguieff (1990), p. 120.]。
- (39) Bourseiller (1989), p. 179.
- (40) Duranton-Crabol (1988), p. 95.
- (41) Taguieff (1985b), p. 72.
- (42) Taguieff (1987), p. 15.

## 第5章 差異の防衛—「国民優先」の原則と混血への嫌悪

差異の消去とアイデンティティの解体の危機を前に、新人種主義者の関心は、もちろん、フランス共同体の差異の保全である。換言すれば、それは、自国民への優先的配慮と民族的純粋性の確保＝物理的・文化的混淆の回避を意味している。

例えば、FNやCDHは、フランス国民の利益やアイデンティティの防衛を「国民優先 *préférence nationale*」の原則として定式化している<sup>(1)</sup>。彼らは、フランス人のアイデンティティを防衛し、移民の流入を抑制するためには、フランス人の利益が優先的に保護され、フランス人が自分の国で外国人より上位の権利を行使することが必要だと主張する<sup>(2)</sup>。つまり、「外国人の利益に対して、フランス人のそれを優先すること」「フランス人第一 *les Français d'abord*」が求められている<sup>(3)</sup>。

「国民優先」の原則は、FNによって具体的政策として展開されている。例えば、1984年のプログラムでは、フランス市民の地位から外国人のそれを区別するために、国籍法の改正、学校での異文化教育の廃止、家族呼び寄せの停止、不法入国者や犯罪を犯した外国人の追放、失業中の移民の母国送還、家族手当や社会的扶助のフランス国民への制限、難民に関するジュネーヴ条約のより良い適用、フランス国民の優先的雇用などの対策が打ち出されている<sup>(4)</sup>。

1993年に発表されたFNのプログラムでも、第三世界からの移民の流入を抑制するための国民優先政策として、フランス人の優先的雇用、フランス人の低家賃住宅への優先的入居、フランス人家族への家族手当の制限、社会的扶助のフランス人への優先的付与、雇用者側の抛出による移民帰還の基金設置といった諸措置が提起されている<sup>(5)</sup>。

同様に、CDHも、アイデンティティと国民主権の防衛を優先的に配慮して、フランス人と外国人の地位を区別するために国民優先の原則の周囲に立法を編成することを提起し、次のような具体的提言をしている<sup>(6)</sup>。

出生地主義による国籍付与の廃止、労使調停委員選挙などを含む外国人へ

の政治的権利の付与への反対、犯罪を犯した外国人の追放、外国人団体への認可制、身分証明書の予防的取締り、難民認定の制限、学校での外国語と異文化の教育を義務づけた1975年と1983年の通達廃止、80%以上がフランス人からなるクラス編成、フランス人とEC諸国民への家族手当の限定、外国人への社会的扶助の制限などである。

「国民優先の原則」は、外国人に対する差別的政策ではないのだろうか。ルペン、FNの反移民的な立場を擁護して、その差別性を否定する。彼によれば、それは「人種優先 *préférence raciale*」ではなく「国民優先 *préférence nationale*」を意味するのであり、個人の意思とは無縁の与件である「人種」ではなく、個人の任意の行為で変更可能である国籍を考慮するものだと弁明している<sup>(7)</sup>。

結局、新人種主義イデオロギーによれば、自国民を優先的に配慮するのは当然で、逆に、低家賃住宅への入居や教育現場で、移民をフランス人と同等に扱ったり、フランス人より優遇することは、フランス人に対する差別であり、反フランス的人種主義ということになる<sup>(8)</sup>。

また、国民的アイデンティティの強化の要請は、国民の歴史的・文化的遺産や過去の記憶・神話の復権を重視する。つまり、国民共同体の差異性を構成する諸要素を強調することで、国民的アイデンティティへの自信とコンセンサスを強化する戦略と言える。

GRECE は、ユグヤーキリスト教以前の異教的なインドーヨーロッパ語族の社会をモデルとして掲げているが<sup>(9)</sup>、それは、はるかな過去の記憶と神話に依拠して、フランス国民（もしくはヨーロッパ諸国民）の共有しうる明確なアイデンティティの核を設定する戦略といえる。

CDH にとっては「アイデンティティと近代社会の記憶にのしかかる極めて現実的脅威に対しては、忘却を打破するために教えられる歴史の保全活動を対置すべきで」「集団的記憶のみが、近代的生活の不断の変化に国民的アイデンティティに適応させる」のだった<sup>(10)</sup>。

また、FNも、伝統的諸価値の復興とフランス人のアイデンティティの保全を打ち出している<sup>(11)</sup>。

例えば、FNが文化の振興を唱えるのは「文化が単なる娯楽や芸術ではな

く、アイデンティティを形成する態度や規範、集团的表象、シンボル、記号、習俗の象徴的支柱である」<sup>(12)</sup>からであった。

次に、差異の尊重を強調する新人種主義にとって、民族的共同体の独自性の保全・強化、民族の純粋性の保全は重要な関心である。そのためには、民族の純粋性を汚す文化の混淆や混血（＝差異の衰弱）は、是非とも回避すべきことである。即ち、差異に関する規範は、必然的に接触の強迫観念と混淆の恐怖に帰着する。何故なら、文化的差異の維持は、混淆を回避することを意味しているからである<sup>(13)</sup>。

例えば、ルペンは、混血による人類の融合はユートピアであり、極めて深刻な対立を発生させるので、民族の混淆に導くような政策は現実的オプションではないと断言している<sup>(14)</sup>。

同様に、FN幹部のブリニョー (F. Brigneau) も「混淆と混血を避けるのが好ましい。それは、私が帰属する人種の優越性を維持するためではなく、その差異とオリジナリティを保全するためである」と人種の混淆を否定している<sup>(15)</sup>。同様に、NDにとっても、2つの文化の混合は、植民地化が示すように、相互の退化をもたらすし<sup>(16)</sup>、混血は没落、デカダンス、頹廃を意味していた<sup>(17)</sup>。

さて、彼らの混淆の回避による民族共同体のアイデンティティ保全という絶対的要請は、結局は、移民という「異分子」の排除に帰結する。つまり、フランス人の国民共同体の差異を保全するという至上命題を前に、移民にとっては二つの選択肢しか残されていない。彼らが、自分たちの言語や文化を喪失して自己の差異を放棄し、フランス社会へ自発的に帰化するか、さもなくば、母国に帰国するかを選択が迫られるわけである<sup>(18)</sup>。彼らの差異の尊重という非常に寛容的な言説は、極めて非寛容な結論に導かれるのであった。

当然、彼らは、反人種主義陣営から、移民問題への一つの解答として提示されているフランス社会の多文化・多民族社会化を拒絶する。「わが国が、自己の特異性を喪失する複数文化社会に変わるのを見るのを拒むのは、自分たちと他者を尊重するから」<sup>(19)</sup>であり、自他の差異を保全するという至上命題に反するからであった。

CDHによれば「多文化社会は、得るものより失うものの方が多く」「多文

化社会は幻想」であり、フランスのアイデンティティの否定であり「レバノン化」への道であった<sup>(20)</sup>。また、彼らによれば、フランス在住の移民は、一般に出身国の民衆階層に属し「知的文化」を身に付けていないし、移民の子弟も大部分が文化を欠いており、フランス文化を受容しえない。故に、多文化社会の形成に移民が貢献することはありえず、フランスにとって、多文化社会というプロジェは「文化的自殺」の危険性があるという指摘もなされている<sup>(21)</sup>。

FNにとっても「人格障害に苦しむ個人と同様、多文化社会に変質することで分裂した国民は、根本的に不安定化するだけ」なので「諸国民のアイデンティティの名において多文化社会を拒絶することは第一の本質的準拠」であった<sup>(22)</sup>。

以上のように、「国民優先」の政策と文化的・歴史的遺産の復権による国民的アイデンティティの強化と、文化的・物理的混淆による国民共同体の不純化の回避という方針が、彼らの結論であった。国民共同体への「異物」の侵入に警鐘を鳴らし、民族的アイデンティティの保全を訴える新人種主義は、差異の尊重を前面に掲げて自らの主張を展開したが、結局は移民を排斥するエスノセントリックな結論へと帰着する。そのような方向性は、現在のフランスで、「統合 *intégration*」や「編入 *insertion*」といった概念によって議論されている「多民族社会」「多文化社会」といった社会像とは、真っ向から反するものであった。

(1) Birnbaum (1992), p. 319, de Wenden (1988), p. 331.

(2) de Wenden (1988), p. 332, Le Pen (1985), p. 84.

(3) Le Pen (1984), p. 110, idem. (1985), p. 84.

(4) FN (1984), p. 117.

(5) FN (1993), pp. 45-7.

(6) CDH (1984), pp. 251-3.

(7) Taguieff (1991a), p. 45.

(8) Maricourt (1993), p. 29, Le Pen (1984), p. 171, (1985), p. 219. FNは「反フランスの言説を広げ、フランス国民を損なう見解を教え、ほんとうの外国人優先を許していることで、移民ロビーと国民教育、フランス政府は非難されるべきである」と「反フランスの人種主義」を告発している [FN (1991), p. 105.]。

(9) 畑山 (1991), 30-1 頁。

- (10) CDH (1985), pp. 26, 28.
- (11) Taguieff (1985c), p. 176. FNは、1984年のプログラムの中で「FNにとって、エコロジーは抽象的なものではない。それは、フランスの歴史的遺産の例外的な美しさや豊かさによってまずは正当化される。フランスの美を保全することは、建築や芸術の遺産、自然的遺産の美の保全である」と「フランスの美」の防衛を訴えている [FN (1984), p. 173.]。
- (12) FN (1985), p. 167. FNによると「エコロジーはアイデンティティの概念と切離しえない」と、エコロジーもアイデンティティの問題に結びつけられている [FN (1993), p. 113.]。
- (13) Taguieff, (1985b), p. 83. idem. (1989c), p. 180, Haghighat (1988), pp. 236-7.
- (14) Le Pen (1989), p. 22.
- (15) Taguieff (1987), p. 334.
- (16) Haghighat (1988), p. 217.
- (17) Taguieff (1984b), p. 37.
- (18) CDH (1984), p. 208, Bockel (1991), p. 230, Taguieff (1985b), p. 81.
- (19) Taguieff (1990), p. 116.
- (20) CDH (1984), pp. 199, 204, 225.
- (21) CDH (1984), pp. 202-4.
- (22) FN (1993), p. 36.

## おわりに

現代フランスの新人種主義は、第一章のタギエフによる人種主義のタイプ分けに従えば、共同体的価値に立脚し、そのオリジナリティの保全を重視する「伝統・共同体主義的人種主義」(R II) に分類されうることが確認しえた。

そして、その具体的特質は、①国民の中に拡大していた反外国人感情とアイデンティティへの不安感を煽り、移民＝「侵入者」としてフランスのアイデンティティの防衛をアピールし、②差異の擁護を前面に立て(＝「差異への権利」)、それを自民族の文化・伝統・歴史などの「差異性」の擁護に読み変え、③結果として、自民族の優越的地位の防衛、非白人移民の排除、自民族の純粋性保全、文化的・物理的混淆の忌避といった立論にあった。

さて、以上のような理論的特質をもつ新人種主義の登場は、従来の反人種



主義理論の非有効性を明らかにした。第一に、新人種主義の立論においては、従来の基本的概念がズラされていった。即ち、人種からエスニシティや文化へ、不平等から差異へ、差異への嫌悪からその尊重へと人種主義の概念的軸は移動させられた。故に、人種主義＝差異の否定、不平等の肯定、劣等民族の差別といったイメージでは、人種主義への有効な対応ができない事態が現出している。例えば、新しい人種主義は、人種差別の対象を「人種」という言葉を援用せず伝える迂回策を採用している。つまり「ヨーロッパ系」人口と「非ヨーロッパ系」人口との間を乗り越えられない差異、相互の非両立性、相互の非同化性を提示するだけで人種差別的効果をあげている。また、第三世界主義的言説で差別的主張を正当化し、フランス人への「逆差別」を糾弾するなど、新人種主義の言説は巧妙さを見せている。

第二に、反人種主義陣営から、移民問題の解決策として提示されている「多文化社会」「多民族社会」も、現実における民族コミュニティの共存の困難性に依拠した新人種主義の攻撃を受けている。彼らは、多元主義フランスは、不可能であると同時に、望ましくもないし、「多文化」フランスは、フランスの否定であり、多元主義は、否応なく「万人の万人に対する戦争」に行き着くと断定している<sup>(1)</sup>。また、民族の混淆と融合という一種のユートピア的展望も、民族のアイデンティティの破壊として一蹴されている。

新人種主義の言説は、他にも、フランス社会にとって重要な問題を投げかけている。彼らは①政治的理念を共有する人々の契約共同体（ナシオン）としての国民観に対して、血統や伝統による自然的共同体（フォルク）としての国民観を対置している<sup>(2)</sup>。第三世界からの移民がフランス社会に容易に統合されない現実を前に、自国民に対する優先的配慮（「国民優先の原則」）と国民共同体の純粋性とオリジナリティの保全といった極めて情緒的・排他的な主張を掲げるナショナリズムが拡大している。

②それは、共和主義的統合の神話への重大な挑戦でもある<sup>(3)</sup>。即ち、1789年のフランス革命は、人権は民族的・宗教的起源から離れる程度に応じて平等に認められるという原理に立脚していた。以降、様々な民族的出自の個人がフランスに統合されてきた。ところが現在、イスラームと新しい移民家族に直面して、旧い「受入れの地 *terre d'accueil*」であるフランスでも多くの不

安の兆候が表面化し、そのことは、統合の共和主義・ジャコバン的モデルと国民的アイデンティティを問い直している。人権の祖国フランスは、外国人嫌い与人種主義の餌食になりつつあるのではという疑惑が生じている<sup>(4)</sup>。

③また、新人種主義の射程は、西欧近代の諸原理への批判にも及んでいる。新人種主義は、不平等・差別・排除を肯定するため、普遍主義・平等主義・人権といった概念を攻撃する。啓蒙的理念に始まる近代的人権思想は、その抽象性、理念と現実のズレ故に、不平等な現実に依拠する新人種主義からの攻撃に曝されている。即ち、個人の自由と権利を強調する普遍主義に対して、新人種主義は、歴史や伝統、文化を共有する共同体主義的アイデンティティを強調する特殊主義を武器に攻撃をかけている。西欧近代の諸価値を体現する反人種主義（＝A R I）が新人種主義に有効に対応していない現実こそが深刻な事態だと言えよう<sup>(5)</sup>。

最後に確認しておくべきことは、結局、新しい人種主義者の基本戦略が、差異の称揚を通じた差異の拒絶にあることである。彼らは「差異への権利」を援用するが、それは、真に他者の存在への寛容、マイノリティとその文化の尊重、多文化・多民族社会の承認の方向ではなく、自文化・民族の独自性の保守、つまり、自らの差異の称揚へと向かう。究極的には、自らのアイデンティティを脅かす異なる他者の拒絶・解体へと帰結する。

新人種主義は、フランス社会を支配する不安の拡大を養分として、1980年代に成長を遂げた。現代フランスにとって最も深刻なことは、そのような現象を前に、問題解決を展望する知的エネルギーが枯渇しているかのように見えることである。そのような状態の下で、フランス社会は、排外主義とナショナリズムの台頭に身をゆだねるという暗いシナリオを回避しうるのであろうか。そのことは、フランス社会だけが直面している試練ではなく、今や、欧米先進国に共通の現象になりつつある。西欧近代が育んできた人権・平等といった諸価値に対する深刻な挑戦を前に、フランスやドイツをはじめとした先進諸国は、真の共存原理の模索を求められている。

(1) Taguieff (1990), p. 121.

(2) 梶田 (1992), 235-7 頁。「国民国家は、民衆の運命を実現するために組織された民衆の共同体である。それは倫理的実体であり、民衆の魂の擁護者である」という

- ルペンの国家観が、彼の共同体的・有機体的国家観をよく表現している [Plenel et Rollat (1992), p. 193.]。
- (3) Schain (1990), pp. 267-8.
- (4) Le Gall (1991), p. 119.
- (5) フランスの1980年代における反人種主義が、人種主義を体現していると考えられたFNとルペン人の攻撃に集中し、反FN、反ルペン運動化しているが、FNの大衆的広がりの前に、制度的・法的措置では、それに有効に対処しえていないこと、最近の新人種主義の形態に理論的に対応しえていないことが明らかになっている。フランスの反人種主義陣営が抱える欠陥と困難については、とりあえずは[Gallisot (1985), Taguieff (1989b), idem. (1993)]を参照されたい。

#### 文献一覧

- [1] G. Abet, et, M. Sajous (1986), "Contrepoint ou l'art d'être républicain", *Mots*, no. 12.
- [2] G. Altheabe (1985), "Production de l'étranger xénophobie et couches populaires urbaines", *l'homme et société*, no. 77-8.
- [3] Ch. d'Appollonia (1988), *L'extrême-droite en France*. Édition Complex.
- [4] R. Aron (1979), "La nouvelle droite" dans J. Brunn (1979).
- [5] ——— (1983), *Mémoire*, Juillard.
- [6] E. Balibar (1989), "Le racisme : encore un universalisme", *Mots*, no. 18.
- [7] ——— (1992), *Les frontières de la démocratie*, Éditions la Découverte.
- [8] A. Benoist (1986) *Europe, Tiers monde, même combat*, Robert Lafont.
- [9] ——— (1979), "Le retour de Dieux" dans Vial (1979).
- [10] ——— (1979), *Les idées à l'endroit*, Éditions libres.
- [11] ——— (1993), "Le droit à la différence", *Elément*, no. 77.
- [12] G. Birnbaum (1992), *Le Front National en politique*, Édition Balland.
- [13] S. Bonnafous et P. Fiala (1986), "Marques et fonctions du texte de l'autre dans la presse de droite et d'extrême droite (1973-1982)", *Mots*, no. 12.
- [14] Ch. Bourseiller (1989), *Les ennemis du système*, Robert Lafont.
- [15] ——— (1991), *Extrême droite-L'enquête*, François Bourin.
- [16] J. Brunn (éd.) (1979), *La nouvelle droite*, Nouvelles Éditions Oswald.
- [17] J. -Y. Camus et R. Monzat (1992), *Les droites nationales et radicales en France*, Presses universitaires de Lyon.
- [18] A. Cambell (1986), *La culture politique du Front national : Presentation de évolution d'une tradition politique française*, Mémoire de DEA, Cycle supérieur d'Histoire du XX é, IEP (Paris).
- [19] Le Club de l'Horloge, (1985), *L'identité de la France*, Albin Michel.
- [20] Commission nationale consultative des droits de l'homme (1990), *La lutte*

contre le racisme et la xénophobie, La Documentation française.

- [21] A. Duhamel (1993), *Les peurs françaises*, Flammarion.
- [22] A.-M. Duranton-Crabol(1988), *Visages de la Nouvelle droite-Le GRECE et son histoire*, Presses de la fondation nationale des sciences politiques.
- [23] G. Ford (1990), *Facist europe. The Rise of Racism and xénophobia*, Pluto Press.
- [24] Front national (1985), *Pour la France*, Albatros.
- [25] ——— (1993), *300 mesures pour la renaissance de la France*, Éditions Nationales.
- [26] ——— (1991), *Militer au Front*, Éditions nationales.
- [27] G. Le Gall (1991), "L'effet immigration" dans SOFRES, *L'état de l'opinion 1991*, Seuil.
- [28] R. Gallissot (1985), *Misère de l'antiracisme*, Édition de Arcantère.
- [29] A. Griotteray (1984), *Les immigrés : Le choc*, Plon.
- [30] C. Guillaumin (1991), "'Race' and discourse" in M. Silverman (ed.) *Race, Discourse and Power in France*, Avebury.
- [31] Ch. Haghighat (1988), *Racisme "scientifique"-Offensive contre l'égalité social*, Édition L'Harmattan.
- [32] G. Harris (1990), *The Dark Side of Europe-the Extrême Right Today*, Edinburgh University Press.
- [33] G. Hourdin (1980), *La nouvelle droite et les chrétiens*, Édition du Cerf.
- [34] D. Jacquin (1992), "Face au racisme populaire", *Revue française des Affaires Sociales*, no. hors série.
- [35] L. Joffrin (1990), "Les vérités qui dérangent", *La Nouvel Observateur*, 13-19 septembre.
- [36] N. Krikorian (1986), "Européanisme, nationalisme, libéralisme dans les éditoriaux de Louis Pauwel (Figaro-Magazine 1977-1984)", *Mots*, no. 12.
- [37] H. Laux (1974), *La formation du "Front national pour l'unité frangaine"*, Mémoire présenté à l'institut d'Etudes politiques de Paris.
- [38] E. M. Lipiansky (1991), *L'identité française*, Éditoin de l'espace européen.
- [39] J. Marchard(1977),"Le GRECE:une entreprise foncièrement réactionnaire", *Raison Présente*, no. 44.
- [40] Th. Maricour (1993), *Les nouvelles passerelles de l'extrême-droite*, Édition Many.
- [41] C. -V. Marie (1990), "Immigration, crise et restruction : une nouvelle donne", *Les Temps Modernes*, nos. 529-30.
- [42] N. Mayer et P. Perrinaut (éd.) (1989), *Le Front national à découvert*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques.

- [43] O. Milza (1988), *Les Français devant l'immigration*, Éditions Complexe.
- [44] R. Monzat (1992), *Enquêtes sur la droite extrême*, Le Monde Éditions.
- [45] L. Pauwels (1979), "Le suicide par sinistrose" dans Vial (1979).
- [46] J. -M. Le Pen (1984), *Le France d'abord*, Michel Lafon.
- [47] ——— (1985), *La France est de retour*, Michel Lafon.
- [48] ——— (1989), *L'Espoir*, Albatros.
- [49] P. Perrineau (1993), "Le Front nationale 1972-1992", dans M. Winock (sous la direction de), *Histoire de l'extrême droite en France*, Seuil.
- [50] M. Poiatowski (1978), *L'Avenir n'est écrit nulle part*, Albin Michel.
- [51] A. Policar (1992), "Racisme et anti-racisme : un réexamen" dans G. Ferreol (éd.), *Intégration & exclusion*, Presses Universitaires de Lille.
- [52] R. Rémond (1983), *La politique n'est plus ce qu'elle était*, Calmann-Lévy.
- [53] M. Revérioux (1991), *L'Extrême droite en questions*, Etudes et Documentation Internationale.
- [54] A. Rollat (1985), *Les hommes de l'extrême droite*, Calmann-Lévy.
- [55] M. A. Schain (1985), "Immigrants and Politics in France" in J. S. Ambler (ed.), *The French Socialist Experiment*, Institute for the Study of Human Issues.
- [56] ——— (1988), "Immigration and Changes in the French Party System", *European Journal of Political Research*, Vol. 16, no. 5.
- [57] ——— (1990), "Immigration and Politics" in P. A. Hall, J. Hayward and H. Machin (ed.), *Developments in French Politics*, Macmillan.
- [58] M. Silverman (1992), *Deconstructing the Nation, Immigration, Racism and Citizenship in Modern France*, Routledge.
- [59] P. -A. Taguieff, (1984a), "Alain de Benoist, Philosophe", *Les Temps Modernes*, no. 451.
- [60] ——— (1984b), "La nouvelle droite et ses stratégies", *Nouvelle Revue Socialiste*.
- [61] ——— (1984c), "La stratégie culturelle de la «nouvelle droite» en France (1968-1983)" dans R. Badinter (éd.), *Vous avez dit Fascismes?*, Éditions Montalba.
- [62] ——— (1984d), "La nouvelle droite contre le libéralisme", *Interventions*, no. 9, mai-juin.
- [63] ——— (1985a), "La démagogie à visage républicain", *Revue politique et parlementaire*, no. 914, mars-avril.
- [64] ——— (1985b), "Le Néo-racisme différentialiste. Sur l'ambiguïté d'une évidence commune et ses effets pervers : l'éloge de la différence", *Langage et Société*, no. 34.
- [65] ——— (1985c), "L'identité française et ses ennemis-Le traitement de l'

- immigration dans le national-racisme français contemporaine”, *L’homme et la société*, nos. 77-8.
- [66] ——— (1986), “L’Identité nationale saisie par les logiques de racisation. Aspects, figures et problèmes du racisme différentialiste”, *Mots*, no. 12.
- [67] ——— (1987), *La force du préjugé*, Éditions La Découverte.
- [68] ——— (1988), “De l’anti-socialisme au national-raciste: deux aspects de la recomposition idéologique des droites en France”, *Raison présentée*.
- [69] ——— (1989a), “Politisation de l’immigration et racisme: lectures”, *Mots*, no. 18.
- [70] ——— (1989b), “Réflexions sur la question antiraciste”, *Mots*, no. 18.
- [71] ——— (1989c), “La métaphysique de Jean-Marie Le Pen”, dans Mayer et Perrineau (1989)
- [72] ——— (1990), “The New Culture Racism in France”, *Teros*, no. 83.
- [73] ——— (1991a), “Les métamorphoses idéologiques du racisme et la crise de l’antiracisme” dans P. -A. Taguieff (éd.), *Face au racisme Tome2*, Éditions La Découverte.
- [74] ——— (1991b), “Les doctorinaires de l’ordre nouveau”, *Le Nouvel Observateur*, 28 novembre-4 décembre.
- [75] ——— (1993), “L’antiracisme en crise-Elements d’une critique réformiste” dans M. Wieviorka (1993).
- [76] P. Vial (1979), *Pour une renaissance culturelle-Le GRECE prend la parole*, Copernic.
- [77] C. W. de Wenden (1988), *Les immigrés et la politique*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques.
- [78] M. Wieviorka (1991), *L’Espace du racisme*, Seuil.
- [79] ——— (1992), *La France raciste*, Seuil.
- [80] ——— (1993), *Racisme et modernité*, Éditions La Découverte.
- [81] 江原由美子 (1985) 『女性解放という思想』(勁草書房)
- [82] 笠間千浪 (1990) 「く反人種主義」言説における差異と普遍の相克—タギエフの差異主義的新人種主義をめぐる— 『社会学年誌』(早稲田大学文学部) 第31号
- [83] 梶田孝道 (1992) 「同化・統合・編入—フランスの移民への対応をめぐる論争」伊豫谷登士翁, 梶田孝道編 『外国人労働者論—現状から理論へ』(弘文堂)
- [84] 管孝行 (1986) 「いま反差別とは何か—近代ヒューマニズムをこえて」管孝行編 『反差別の思想的地平』(明石書店)
- [85] 畑山敏夫 (1889), 「フランス極右の現在—フロン・ナショナル (国民戦線) とルペン—」 『政治研究』(九州大学政治研究会) 第36号
- [86] ——— (1990), 「フランス極右の台頭—フロン・ナショナル (国民戦線) 1984-1988年—」 『佐賀大学経済論集』第23巻第1号

- [87] ——— (1991), 「『新右翼 Nouvelle, droite』現象—フランス極右の復興—」  
『社会科学研究年報』第21号
- [88] ——— (1993), 「ミッテラン政権下の移民と政治」西堀文隆編著『ミッテラン政権下のフランス』（ミネルヴァ書房）所収
- [89] 花崎阜平 (1993) 『アイデンティティと共生の哲学』（筑摩書房）